

を置いてやらないからだ。本さえあれば、そして、そういう環境と施設さえあれば、子どもたちは絶対本を読む。もし、子どもが本を読まなくなったとしたら、そういうことをしてやらない大人たちの責任だ」と。

たしかにそのとおりだと思います。どの文庫でも、子どもが大勢おしかけてきて、うれしい悲鳴をあげています。部屋は狭いし、本はたりないし、世話する人もいないしで、これ以上子どもたちを受け入れることは困難だというわけです。文庫の会員になりたいという子どもたちを、どう断つたらいいか悩んでいます。子どもたちに自由で気楽にのびのびと読書のたのしさを味わわせてやりたいと思います。そのためには、沢山の図書館、とくに児童図書館が必要です。このことは、行政に真剣に考えていただきたいものです。

文庫の連絡機関として「よこはま文庫の会」があります。文庫相互の交流、勉強、運動を目的としています。現在会員は百五十名ほどで、毎月例会を開いて研究しているほか、講座「子どもの本の学校」を開催しています。講師には、わが国でも一流の児童文学者、画家、大学教授などを招いて、七回にわたって講義を聞いています。これも本年は第四期を迎え、受講者は四百名をこえる盛況です。

いま、よこはま文庫の会では、「すべての子どもに読書の喜びを」という考えに基き、障害児にも本を読むたのしさを知ってもらおうと、その絵本づくりに意欲をもやしています。目の見えない子らにも利用できる「さわわる絵本」つまり布

## いずみ文庫の八年間

茂木瑠璃子

切り拓かれて寒々とした中にぼつんとできた団地の中に、子供を持ったお母さんのはいままから八年前のことです。子供たちにとっても、小さい子供があつて遠くへ出ていかれない育児期にあるお母さんにとっても、まさに知識の泉のようなものだったのです。いちばん初めに家を開放された方のお宅では、下の女の子が、まだはいはいをしていたということですから、ずいぶん大変だったろうと察しられます。

現在会員三百六十世帯、千名余り。一日の利用者三百名くらい。運営がスムーズに行われる理由に、はじめの組織作りがきちんとできていたことがあげられるでしょう。貸出し当番に約百名、一人の割当てが一時間半、二カ月に一回の割でまわってきます。会報の配布に約五十名、ガリ切り、プリントとすべてお母さんの奉仕によってささえられています。

製の絵本を、すでにいくつか制作して、障害児施設に寄附して大変に喜ばれています。地域文庫は、これからもいろいろな活動をしていくでしょう。

現在利用者が増えている割には、お手つだいでくださる方が増えないのは、自分たちが作ってささえられているという気持ちが薄いからでしょうか、淋しい気がします。いずみ文庫は貸出し以外に、図書館からの本の入替え、年一回の棚下し（在庫数調べ）と子供会という行事があります。このなかで夏、冬の子供会について書きます。

### 子供会や本を読む会も

いまでこそ団地のまわりには文化的施設が続々できてきましたが、遠くへ一人で行かない幼い子供にとって、子供会は楽しみの一つです。二、三年前から、夏は手作りおもちゃ、たとえば紙染め、染めた紙で作る姉妹人形、ちょうちよ貝の腰下げ、麻縄人形。幼児のためには、かざぐるま。男の子のためには、パッチン、割ばし鉄砲など。

去年の子供会では、ナイフで手を切る

子供が続出で、係のお母さんも現代っ子の不器用さ、過保護ぶりにびっくりしました。

子供会をする前には、文庫仲間の日吉のひまわり文庫へ講習を受けにいった準備をします。冬は紙芝居（これは読みかかせのお母さんが担当します）、人形劇などです。これの準備にも、やはり図書館仲間の品川のゆたか図書館や源氏前図書館にお願いして、人形を借りたり、知恵を借ります。

「子供の本を読む会」の資料集めにも力をかしてもらっています。月一回の「読む会」の集りに約十名のお母さんが参加、現在はヨーロッパのリアリズムの流れを系統的に読むということで、アーサー・ランサム、ウィリアム・メイ、フィリップ・ターナーと読み進んでいます。議論百出、個性豊かな集りで、誰が休んでも淋しい気がします。

「よみかかせ」もいずみ文庫を知る上で大切なグループです。「きょうは眼鏡のおぼちゃんだったよ、面白かったよ」と、子供の声からも人気の様子がかげえまします。

最後に、文庫の本ではあきたらなくなった小学校高学年以上の子供たちのために、近くに公立図書館を作ってほしいという願いのなかから成長していった「図書館を作る会」というグループがあります。

す。運動資金作りのための古本バザー、図書館への働きかけ、市への陳情、その間をぬってより良い図書館を作ってもらおうと自分たちの勉強のための図書館見学、図書館員を招いて「図書館の発見」をテキストにした読書会等とさかんなエネルギーはどこから出て来るのでしょうか。

横浜文庫の会や田園都市線沿線の文庫との共賛で行った、いぬいとみこさんの講演会、親子読書研究会への参加、タウン誌のコラム「私の本箱」の担当も、新聞発刊以来、月二回ずつ続いています。そのコラムにのった、八木重吉の詩が好きだという人が集まって話す機会を持ったのも、大きな広がりの中のひとつだと思います。

## 図書館開館で一つの節に

順調に育ってきた文庫も八年目を迎えて、一つの節にきたようです。図書館を作る会の運動が実り、あざみ野駅前に市立山内図書館ができることになり、四月に開館が決まりました。その図書館のサーヴィスエリア内に入るはずみ文庫と、となりにある郵政宿舎へくる配本車「はまかぜ」の配本が、野毛の図書館の方で問題になり、「はまかぜ」は打切りの方で考えはじめられています。

郵政の子供たちをいずみ文庫で受入れてほしいという話が郵政の方から出てい

ます。手つだいの人数、本の数、ロビーの広さなどを考えるど無理だろうという意見、今のいずみ文庫は大きくなりすぎたので、本来の家庭文庫に戻して、暖かい雰囲気のある文庫にしたいという意見、沢山の意見が出て、早く解決しなければならぬ大きな問題です。新しくできた図書館で子供のための行事が沢山行われるなら、今までの仕事のやり方も、もう一度考え直す必要があります。

一月末に図書館長を招いてお話しをする機会がありました。図書館の方は、まず動きだしてからでないと何ともいえないと大分あいまいです。

## 福祉活動

### 文庫活動の中から連帯へ

八年前、私たちの子どもたちが、小学校一年生に入學し、その学級懇談の中で、テレビにかじりついている子どもたちをどうしたらよいか、と話し合った結果、子どもたちに、ダメとひとこと言うよりも、スポーツの出来る広場を獲得したり、良い本を身近においてあげたいと言う、ささやかな願いを持ちました。初めは四、五人のお母さんの協力と、三十冊の持ちよりの本を、りんご箱につめ、

現在私達が望んでいるのは、山内図書館から配本を受けたいということです。

B館なので配本車はつきませんというところではなく、専用の車がないならば、他の部門の車をあいているときに利用するというような、住民本位の考えをしてほしいということです。遠い野毛の図書館からでなく、近くの図書館から配本してほしいと熱望します。

文庫としては、四月から蔵書と人名台帳をカード式にしようと考え準備を進めています。一つの事が決まらないうと次の段階へ進めないと、いともどかしさを感じているこの頃です。

### キビタスの会 簡 照子

二週間毎に廻す巡回文庫が生まれました。近くに図書館がないと言う状況からほとんど会員が増え、私たちの手に負えないと、市へ図書館設置の陳情をいたしました。しかし、すぐに建設できるものではありません。図書館ができるまで私たちでささえようと、気を取り直し頑張ることにしました。

本が足りないバザーをやる。子供が多く集まる秋にはハイキング、夏はキャンプと、必要に迫られた発展の中で、方針を間違っはいけない、また、

子供たちに負けないように勉強をしましょうと、母親クラブ、婦人学級、児童文化講座と取り組み、婦人学級で学んだ、伝統の手づくりのおもちゃを児童文化講座でお母さんが教える、また、子どもといっしょに教わった人形劇（人形づくりから上演まで）は、いまではバザーのアトラクションとして、毎年小学校四、五年生によって受け継がれ、上演されています。

当時一年生だった子がいまでは中学二年生、もうバザーもほとんどその子たちが中心になって開かれ、いまでは地域のたのしみの恒例の行事として、十一月三日のくるのが待たれています。

会員と地域の人々のふれ合いのなかで、自分たちのために一生懸命してきたことなのに、地域の人々が暖かい目で眺め、あらゆる協力をして下さり、すばらしい仲間づくりができたことを感謝の気持ちでかみしめたのでした。

六世帯にふくれ上った文庫の仲間の中で、ダウン症、自閉症、智恵遅れの子どもたちにめぐり合い、＃どの子にも幸せを＃の願いが福祉について学ぶ姿勢をもちました。

この時点で、鶴見区内にはいろいろのグループが地域で活躍していることを知り、一度皆さんで集って情報交換などをし、いっしょに学べるものはいっしょ